

禁忌とその弥縫策

《ローエングリン》は悲劇か、喜劇か？

2022/05/21



いま、NHKの土曜講座で、ワーグナーの《ローエングリン》を観ています。ワーグナー・ファンの中には、《ニーベルングの指環》や《トリスタンとイゾルデ》よりも、この《ローエングリン》の方がお好きな方はおおいのです。他のワーグナーのオペラや楽劇と違って、聞き慣れた歴史劇でもあり、物語も清潔で、勧善懲悪で分かり易く、出てくる登場人物たちも、若いローエングリンとエルザ姫という美男美女であり、悪者も、名うての剣士とパガンの魔女です。でも、よくよく見てみると、不思議なことが多いのです。他のワーグナーの作品と違って、物語の構成に矛盾が多いのです。一言で言うと、《ローエングリン》は、悲劇なのか、喜劇なのか？よく分からないのです。そのことを、ここで、お話ししましょう。

ローエングリンの六つの使命

世界を領(し)ろしめす神の役割の一つは、人間の世界にあまねく正義をもたらすことです。ヨーロッパの一地域、ブラバント王国で悪が跋扈(ばっこ)し始めたことを知った神は、聖杯の騎士ローエングリンを差し向けることにしま

した。

そのとき、ローエングリんに与えられた主な使命は六つあります。

- 1) 無実の罪を着せられている領主の娘エルザ姫の潔白を示すこと。
- 2) エルザ姫の夫となること。
- 3) 王国を揺るがす悪人たちを懲らしめること、
- 4) エルザ姫の弟ゴットフリートを領主にすること。
- 5) ブラバント王国の守護神となって王国を統治すること。
- 6) 援助を求めてきたドイツ王ハインリヒに従って、ハンガリーのフン族から西欧を守るために、ブラバントの兵を率いて戦場に向かうこと。

しかし、ローエングリンは、この六つの内の半分しか目的を達成出来ませんでした。1)と3)と4)は達成出来ましたが、残りの半分は失敗におわりました。いえ、3)もあやしいものです。

本当の悪人はエルザ姫

1)は、エルザ姫が、弟殺しの件で悪者のブラバントの伯爵で代官のフリードリヒ・フォン・テルラムントから提訴されたのを受けて、その潔白を晴らすために、ローエングリンはエルザ姫の代理となってテルラムント戦って勝つことです。これは、その通りになりました。喜劇です。でも、このとき、白鳥の騎士は、神性を用いたのでしょうか？テルラムントは、だれもが知る名代の勇士です。テルラムント本人も、豪語します。ハイリヒ王も、ブラバントの兵士たちもこぞって認めるところです。

テルラムント

王よ！何としたこと！

よもや、デンマーク人を打ち負かした私の功績をお忘れになったとでも？

ハインリヒ王

そんなことをわざわざお前に言われるまでもあろうか！

お前が最も高潔な男だということを私は喜んで認めよう。

私には、この公国を治める者は、

誰よりも、お前が望ましいのだ。

だが、かかる事態は、神のみがお決めになることだ！

全ての男たち

神明裁判だ！

神意に従おう！

いよいよ、二人の一騎打ちが始まると、テルラムントは簡単に負けてしまいます。

ローエングリン

(テルラムントの首に刃をかけ) 神意により、お前の命は私のものだ。

(もはや彼を相手にせずに) だが命は赦そう、十分に悔い改めるがいい！

この結果に、魔女のオルトルートは驚きます。いつも、テルラムントを助けるため魔術を使うのですが、今回はその魔術が効かなかったのです。

オルトルート

(テルラムントの敗北を憤怒の形相で見守った後、ローエングリンをまじまじと見つめる)
この男はいったい何者なの？
フリードリヒを倒し、私の魔力も効かないとは？

どうやら、ローエングリンは、この戦いで、神から与えられた力、「神性」を用いたに違いありません。

2) は、エルザ姫の納得も得て、めでたく、夫婦となります。しかし、これは、その通りにはなりません。失敗です。これは悲劇です。前もって、ローエングリンは、エルザに「禁忌」(きんき)を告げて、それを守ることを迫ります。「禁忌」とは、禁止された掟です。ローエングリンは、「あなたは、私に、決してたずねてはならない - 私がだれであるか、私がどこから来たか、私の素性はなんなのか、を」といいます。これが、「禁忌」です。これは、エルザだけが守る「禁忌」です。エルザは、「禁忌」を守ることを約束します。

でも、「禁忌」といえば、「異類婚姻譚」です。人間は、決して、異界の者たち、すなわち、神や動物とは結婚出来ないのです。決して、結婚出来ないのですから、エルザとローエングリンの結末は、悲劇に終わることはハナから分かっています。ローエングリンが使命を受けて聖杯城を出るときから、エルザと出会って禁忌を告げる前から、二人が結婚式をあげたときにも、結婚を終えたあとで夜を迎えたときにも、二人の結婚は破談になることは分かっていたのです。ですから、どこかで、エルザは必ず、禁忌の掟を破ることになります。そして、すべてを台なしにしてしまうのです。このことは、矛盾ではありません。必然です。

このオペラでは、エルザが一番の悪者です。これこそ、矛盾と言えば矛盾です。悪人テルラムントとオルトルート、それに、ヴォータンもフリッカも、いてもいなくても、同じことです。禁忌がすべてです。最後には、エルザは死ぬこととなります。その死の場面のト書きには、「エルザの体から魂が抜け去り、ゴットフリートの腕の中で、滑るようにゆっくりと地面に沈んでいく」(Elsa gleitet langsam entseelt in Gottfrieds Armen zu Boden.) となっています。「entseelen」とは雅語で、シンチンゲル編『現代独和辞典』では「玉の緒の切れた」と訳しています。また、古風な表現をワーグナーは使ったものです。

もう、聖杯の騎士が、聖杯城を出るときから、破談になることは分かっていたのです。失敗が予告されていたことを知らない神さまではないでしょう。それでは、なぜ、失敗を知っていながら聖杯の騎士を人間界に送り出したのでしょうか？ これは、《ローエングリン》の物語における最大の矛盾です。

他の悪人は生き残る

3) は、「王国を揺るがす悪人たちを懲らしめること」です。ここで言う悪人

たちとは、ブラバント王国を乗っ取ろうとする二人の悪人夫婦、すなわち、フリードリヒ・フォン・テルラムントとその妻オルトルートのことです。まず、ローエングリンは、エルザを提訴したテルラムントは試合で倒しますが生命は助けてやり、ハインリヒ王は国外追放を命じます。悪人二人の中で、特に、悪いのはオルトルートです。彼女は、表向きはブラバント王国の伝統あるフリシアのラドポート侯爵のむすめですが、実は魔女で、「パガン」(英: pagan) です。すなわち、「異端者、異教徒 (heathen)、無宗教者、キリスト教の不信者で、古代ギリシア・ローマの多神教者」です。オルトルートが、白鳥の騎士を追い出すために、異国の神々、ヴォータンやフライアに祈るのは、そのためです。《ニーベルングの指環》に詳しい私たちにとってはおなじみの人物であり名前ですが、ここでの彼らは反キリストの異教の神々なのです。

オルトルート

神聖の座から追われた神々よ！ 私の復讐に手を貸して！
この地で蒙った恥辱に対して罰を下す時です！
あなた方への聖なる奉仕を怠らなかった私に力を下さい！
背教者どもの卑劣な盲信を滅ぼすのです！
ヴォータン！ 力強き神よ！
フライア！ 聖なる女神よ！ お聞きください！
私の嘘と偽善を嘉（よみ）したまえ、我が復讐を成功させたまえ！

その甲斐あってか、オルトルートはまんまんとエルザをだまして、「禁忌の掟」を破らせることに成功するのです。これによって、ローエングリンの使命のほとんどは失敗に終わるのです。悲劇なのです。

夫のフリードリヒ・フォン・テルラムントは、仲間四人と、結婚式の夜、ローエングリンを襲って殺されます。しかし、オルトルートは、ここでも、ワーグナーのト書きによれば、終幕で、白鳥が王子ゴットフリートに変わるとき、「ゴットフリートの姿を見たオルトルートはたちまちその場に崩れ落ちる」(Ortrud sinkt [沈む] bei Gottfrieds Anblick zusammen.) とあいまいな言い方になっていて、最後になっても、殺されたり、死んだりすることはなようです。ここは、演出によって、どうにでもなるようです。

苦肉の弥縫策

4) は、「エルザ姫の弟ゴットフリートを領主にすること」です。これも、オルトルートの魔法で白鳥にかえられていたゴットフリートを、ローエングリンが、魔法を解いて再び人間にもどしてやったからです。ゴットフリートは、ブラバント王国の国王として善政を敷くことでしょう。これも、その通りになりました。喜劇です。でも、ゴットフリートは未だ幼い子供です。ローエングリンと姉エルザがついていないのに、それに、まだオルトルートが生きているかも知れないのに、正しく国を治めることが出来るかどうかは疑問です。これは、弥縫策を用いて、半分、喜劇で、半分、悲劇です。

5) は、「ブラバント王国の守護神となって王国を統治することです。これは、完全に失敗に終わりました。悲劇です。

6) は、「援助を求めてきたドイツ王ハインリヒに従って、ハンガリーのフン族から西欧を守るために、ブラバントの兵を率いて戦場に向かうこと」です。むろん、これも、失敗に終わりました。悲劇です。

でも、去って行く前にローエングリンはハイリヒ王にいます —

ローエングリン

王よ、お聴きください！ 私はお伴することは許されません！
グラールの騎士は、ひとたび正体が知られたからには、
仮に掟を破って戦おうとも、もはやいかなる力も発揮できぬのです！
ですが、偉大なる王よ、私は予言いたします。
あなたという清らかな王には、偉大な勝利が与えられますぞ！
遠い将来に至るまで、ドイツの地に東方の部族が勝ちに乗じて、
押し寄せることは決してありません！

このように、神の代理のローエングリンが確約するのですから確かなことでしょう。でも、実際に、神の代理であるローエングリンがブラバント王国の兵を率いて戦場に向かうのと向かわないのとでは格段の違いがあります。ジャンヌ・ダルクが良い例です。このローエングリンの発言は、約束を守らず去って行く者の「弥縫策」(びほうさく:一時的な取り繕い)にすぎません。半分、悲劇で、半分、喜劇です。

このようにみていくと、この《ローエングリン》は、本来は、悲劇であるはずなのに、最後は喜劇仕立てになっています。「禁忌」が絡む物語や演劇やオペラは、禁忌の掟は、必ず破られて悲劇になるのですが、スポンサーや作者や劇場支配人たちは、いつもいつも、なんとか喜劇に終わらせるように、弥縫策も加えて、苦心惨憺(くしんさんたん)しながら、勝手に喜劇にしていまいます。ワーグナーも、例外ではありません。

でも、最大の劇作家の一人であるワーグナーが、必ず悲劇で終わる「禁忌の掟」を知らないわけではありません。でも、「異界の者との結婚は不成立に終わる」という「異類婚姻譚」の掟が真実であるならば、《ニーベルングの指環》などの物語は、元々、成立しません。しかし、人間の女たちと結婚して半神半人の子供たちを造ったヴォータンやアルベリヒの異教の神々は、キリスト教徒とは無縁の「パガン」の対象者たちですから、「禁忌の掟」も効力をもたなかったのでしょうか。そういえば、「この指環によって世界を征服しようとするものは、愛を断念しなければならぬ」というアルベリヒの指環の掟は、「禁忌」ではなく、単なる「呪い」に過ぎませんでした。ワーグナーは、「禁忌の掟」を上手く破る術を知っていたのです。従って、《ニーベルングの指環》は、喜劇で終わっていいのです。

疑ひは人間にあり

日本では、古くから、こういった「異類婚姻譚」(いるいこんいんたん)の一つとして、天人の羽衣を奪って無理矢理女房にする「天の羽衣物語」(あまのはごろもものがたり)が各地に点在します。その内容は、二種類。一つは、漁師が天女

の羽衣を隠して天に戻らないようにして女房にする話。二人は、子供までも作ります。ある日、天女は、子供が歌っていた歌から羽衣の隠し場所を知って、夫も子供も残して天に帰っていきます。

もう一つは、そのパロディとして、本当に「ハッピー・エンディング」で終わる珍しい物語もあります。能の「羽衣」(はごろも)がそれです。もっとも、これは未遂の「異類婚姻譚」であり、「禁忌」が起きるのを、わざと、止めてしまう稀有(けう)なお話です。【[能と狂言の演能団体鏡仙会ホームページ参照](#)】

三保の松原の漁師白龍は釣りから帰ると、虚空に花降り音楽が聞え、妙なる香りがして、ただならぬ様子と見るうちに、浜辺の松に世にも美しい衣が掛けられているのを見つけます。持ち帰り家宝にしようとする白龍。すると、天人が現れ衣を返して欲しいと頼みます。衣を身につけなければ、月世界へ帰ることが出来ない天人は、雁の渡って行く空を見上げつつ嘆き悲しみます。その様子を余りにも哀れに思った白龍は、天人の舞楽を見せるなら返そうと約束します。衣を身に着けて舞おうとする天人に、白龍は疑いを持ちます。

白龍「いやこの衣を返しなば、舞曲をなさでそのままに、天にや上り給ふべき」(いやこの衣を返してしまったら、舞を舞わずにそのまま天に上がってしまわれるでしょう)。

その人間の言葉に、天女はきっぱりと答えます。

天女「いや疑ひは人間にあり。天に偽りなきものを」(天上界には偽りはありません)。

その天人の言葉に恥じて、白龍は衣を返し、天人は月世界の様子を語り、浦の春景色を愛で、天人の舞楽を見せます。

天女は衣を着て舞い始めるが、その姿は雨に濡れた花のような美しさであった。月宮殿では舞の奉仕をする乙女の一人である事を明し、この舞が、後世の東遊びの駿河舞になることを教える。天女は、三保の松原の春景色が天上界のようであるといい、その美しさを讃え、「君が代は天の羽衣まれに来て撫(ぶ:なでる)づとも尽きぬ巖(いわお)ならなむ」と詠まれた歌のようだと歌い舞っていると、それに合わせて、笙、笛、琴の音なども聞こえてくる。その舞う姿は、雪が舞うような美しさであった。

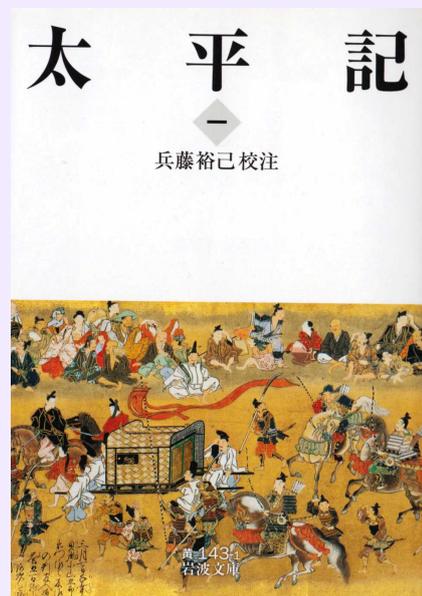
そうやって、東遊びの舞の曲を次々と舞い、国土の繁栄を祈念し、様々な宝物を降らし国土に恵みを施しながら、十五夜の空に輝く満月のようになって富士山の高嶺に昇ってゆき、天空の霞の中に姿を消してゆく。

疑り深い人間も、清らかな天使には敵いません。これは、「禁忌の掟」を未然に防いだことによって、「禁忌」の悲劇から生じる犠牲者たちを救った唯一の

簀だと言っていいでしょう。素晴らしいです。良いお話です。矛盾の多い《ローエングリン》など、足下にも及びません。(笑い)

日本の古典の軍記物にも「禁忌」があること

いつものように、寝る前にベッドで室町時代の軍記物『太平記』を読んでいたら「禁忌」(きんき)という言葉が、突然、出てきました。後醍醐天皇に身方する楠木正成(くすのきまさしげ)が、少人数で小さな城を守り、幕府の大軍を翻弄する「千早城」の有名な場面で、です。『太平記』でも、もっとも読み応えのあるところですよ。【岩波文庫『太平記』第1冊第七巻338頁】



正成が立てこもる「千早破城」(ちはやのじょう: 千早城)を、総勢二百万騎の幕府軍が見物相撲の場の如くに打ち囲みました。わずか千名にも足らざる小勢が立て籠もった千早破城は、廻りが一里に足らぬ小城です。しかし、お城の周りは深い谷に守られ、南北は金剛山につづいて峰は切れていて、金城湯池(きんじょうとうち: 金でつくられていて熱湯を入れた堀をもつ非常に守備がかたい城)の自然の要害になっていました。甘く見た幕府軍は、攻め仕度もほどほどに、一気に攻め落とそうと城の城戸口(きどぐち)近くにひしめいて攻めに掛かったのですが、楠木勢は、お城の高櫓(たかやぐら)の上から大石を抛(な)げかけなげかけ、敵の盾を微塵に打ち砕いて、矢を散々に射たので、一日の内に、幕府軍の手負いと死者は五、六千人に昇りました。そのご、なんど攻めてもおなじことなので、幕府軍は長い時間を掛けて兵糧攻めにすることにしました。

幕府軍は、お城の周りを取り囲んで兵糧攻めにしたことはいいのですが、毎日、毎日、することがなく暇に耐えかねて、専門の花下(はなのもと)の連歌師どもを呼び集めて一万句の連歌会をひらきました。

その初日の発句を、幕府の有力御家人の長崎九郎左衛門師宗が詠みました。

開(さ)きかけて 勝つ色見せよ 山桜

脇の句を、同じく幕府の有力御家人の工藤次郎左衛門が付けました。

嵐や花の かたきなるらん

『太平記』の作者は書きました。

誠に両句ともに、詞(ことば)の縁(えん; 縁語や掛ことば) 巧みにして、句の体、優なれども、御方(みかた: 身方)をば花になし、敵をば嵐にたとへけるは、**禁忌(きんき: 口にしてはいけない不吉な前兆)** なりける表事(ひょうじ: 表現)かなと後にぞ思ひ知られける(あとで思い知った)。

でも、これは「禁忌」ではなく、工藤次郎左衛門が「花には嵐の譬えがあるぞ。みなの人、お気を付け遊ばせ」と注意した「警句」にもとれます。『太平記』は、後醍醐天皇に身方する作者が書いたので、「禁忌」にしてしまいました。しかし、結局は、幕府軍は、楠木正成の計略に散々翻弄され、のちには、二百万騎あったものが十万余騎になり大敗したのですから、まさに、禁じられた「禁忌」を破った祟りだとも思われます。

エルザ懐柔の第2幕

「閑話休題」（かんわきゅうだい:寄り道はこのぐらいにして本題に戻りましょう）。さて、今回の土曜講座は《ローエングリン》の「第3幕」で始まるのですが、その前に、「第2幕」のお復習(さらい)をしておきましょう。前回、見せ場が多かったので解説する機会を逃(の)がしてしまいました。この幕も大事な幕で、歌劇《ローエングリン》の一つのクライマックスでもあります。全幕が、「エルザ懐柔の幕」です。ワーグナーのドラマトルギーが問われるところです。四つの場に分かれます。

1 二悪人の誓いの場

エルザへの訴えを問う神明裁判の試合で、突然現れた異世界の騎士に簡単に破れてしまったオルトルートは、国外追放を命じられてブラバント王国を出ていこうとします。それを、妻のオルトルートが止めます — 「まだ、負けたわけではない。エルザをそそのかして、あの得体の知れない騎士の正体を曝けば、あいつはこの国から出ていけよう。そうすれば、また、この国は私たちのものだ。さあ、誓いを立てよう」。

二人は声を合わせて、異神たちに、エルザと騎士への復讐を誓います。声を合わせて歌う、不気味な「ユニゾンの二重唱」です。

オルトルートとテルラムント

復讐よ、成るのだ。暗き心の夜から成れ。

甘き眠りをむさぼる者よ、災厄が待ち受けていると知るのだ。

2 オルトルートがエルザを泣き落としにける場

夜です。エルザは一人、自室のベランダから明日の幸せな結婚を思いながら、愛に燃える頬をさわやかなそよ風にあてています。下から、オルトルートが悲しげな声で呼びかけます。

オルトルート

エルザ、あなたのせいで不幸のどん底に突き落とされた哀れな女が呼んでいるのです。人里離れた森の中で、私は独り静かに平穏に暮らしていた。私があなたに何をしようとするの？ 私の先祖が背負い続けて来た不幸を私はただ嘆き悲しんでいただけです。あなたが自分から追いつめた男が私を妻にしたからといって、なぜ私の幸福を嫉まねばならないのですか？ 確かに、あの人、不幸な妄想に駆

られて、清らかなあなたさまを罪に落とそうとしました。でも今は、心を引きちぎらんばかりに、そのことを悔い、ひたすら罪を償おうとして生きているのです。ああ、あなたは幸せです。甘い悩みを少し味わっただけで、すぐ新たな生が微笑みかけてきたのですもの。だから幸せなあなたは、私に別れを告げ、私に死の道をたどらせようというのね？ 私の嘆きが、あなたの祝宴に、濁った光を投げかけないようにするために。

あまりのオルトルートの悲しげで不幸な訴えを聞いて、エルザは思わず、オルトルートを慰めるために自分に寝室へ来るように招きます。

それを聞いて、オルトルートは勝ちを確信します。一人、異教の神に感謝を捧げます。魔女のオルトルートにとって、異教の神々の方が正しい神なのです。でも、自らの行為を「ウソと偽善だ」と言っているところは正直でよろしい。

オルトルート

神聖の座から追われた神々よ、わが復讐に手を貸しておくれ。この地で蒙った恥辱に対して罰を下すときです。あなた方への聖なる奉仕を怠らなかつた私に力を下さい。背教者どもの卑劣な盲信を滅ぼすのです。ヴォーダンよ、力強き神よ。フライアよ、聖なる女神よ。お聞きください、わが嘘と偽善を嘉（よみ）したまえ。わが復讐を成就させたまえ。

塔の上から降りてきたエルザは、オルトルートの手を引いて自分の寝室へ招き入れます。

エルザ

こんな惨めな姿のあなたを見ていると、私の胸もつまりそうです。望みがあれば何でも言って下さい。あなたが私に抱いていた憎しみを赦します。あなたも私ゆえに苦しんだことをどうか赦して下さい！

オルトルート

感謝のあまり言葉も出ません。あなた様のお情けに、この無力で惨めな私が、どうやってお返しできましようか。でも、たった一つ、いかなる命令をもってしても私から奪えない力が残っております。私はご注意申し上げたいのです、あまりの幸福に目を眩まさないでください、と。あなたに災いが降りかからないように、私にあなた様の未来を占わせていただきたいのです。あれほどに不可思議な素姓のお方が、魔法の力でここについてと同じように、突然あなたさまから離れて行くことが、よもや有り得ないとても？

エルザ

哀れなあなたには、きっと分からないでしょう。露ほどの疑いの心もなく、人は人を愛せることを。信仰によってのみ得られる幸福を。純粋に人を信じることの歓びを、あなたにも教えて差し上げます

オルトルート

(独白) ああなんと誇りにみちた心だろうか。だけど、これで分かったわ、この女の忠実な心にどうやって打ち勝てるのか。この誇り高き心に狙いを定め、傲慢さが悔いに変わるようにしてやる。

その二人の姿を陰に潜んで観ていたテルラムントは、一人、ほくそ笑みます。

テルラムント

災いが屋敷に忍びこんでいく。妻よ、思う限りの悪たくみを尽くすがよい。私にお前の仕事を止めることはできない。私の敗北こそ、この災いの始まりだったのだから。倒れるがいい、私を追放した者どもよ。いまや私を導くのは、この言葉のみだ — 「我が榮譽を奪いし者は滅びよ！」

3 オルトルートの教会前でのエルザを威嚇する場

一夜開けて、朝です。教会に向かうエルザの前に、突然、オルトルートが現れて行く手を塞ぎます。そして、エルザを指さして、みんなの前で大声で批難します。

オルトルート

偽りの裁判が追放したとしても、夫はその名はいまだこの国では高い名誉を保っている。最も高潔な人と讃えられ、強い剣の力が全ての人に恐れられた。でも、あんたの夫となる人はどうなのよ？ だれもその名を知らないし、あんた自身ですら、その名を口にできないじゃないか。あの男の名を呼べるのかい？ 私たちに教えられるのかい？ あの男がどんな血筋の者で、どこから川を下って来て、いつどこへ帰っていくのかを？ ふん、答えられるはずがないわ。そうしたら、自分の身に危険が及ぶんだから。あの抜け目ない男は、その問いを禁じたというわけよ。ハハハ！ あんたの勇士の清らかさなど、すぐに濁ってしまうわよ。あの男は魔の精を呼び出したから、力を発揮しただけよ。あんたが、そのことをあの男に問いたださないのなら、私たちはこう思うしかないわ、「あんた自身も、あの男の清らかさが傷つくのを怖れて、問いを控えているんだ」とね。

ワーグナーのドラマトルギー

エルザは、驚きます。昨夜は、あれほどしおらしく、心弱く、頭を下げて頼ってきた不幸な女が、突然、反対のことを言い始めたのです。私たちも、驚きます。昨夜の作戦は、一体、どうなったのでしょうか？ 失敗したのでしょうか？ どうしてまた、同じことをいってエルザを苦しめるのでしょうか？ 同じことの繰り返しに、ワーグナーの「ドラマトウルギー」(劇作法)の弱さを思います。

昨夜に変わる、今朝はどうでしょう。一変して、居丈高(いたけだか)にエルザ

の痛いところを突きます。昨夜のオルトルートの話から、だんだん、白鳥の騎士に対する疑いが濃くなってきたのです。神なのか悪魔なのか？ 直ぐに自分を捨てて、やって来たところへ戻って行ってしまわないか？ いつまでも一緒に居てくれるという保証はどこにもありません。名前さえ、分からないのですから……。それに、多くの領民の前であからさまに訴えられたのですから、聞いていただれもが、あの騎士の正体を疑っても不思議ではありません。だれもが、騎士の正体を知りたくなって当然です。「どうしてエルザは、騎士に名前や正体を訊かないのだろうか？」とエルザを疑い始めます。ここに、オルトルートが昨夜、エルザに言ったことを再び繰り返す意味があったのです。これが、ワーグナーの「ドラマトルギー」なのでしょうか？

再びエルザは、自らの立場を証明するように訴えられたのです。前には、夫のテルラムントによって。今度は妻のオルトルートによって。

4 テルラムントのエルザへの脅しの場

今度は、テルラムントの出番です。教会前で騎士とハインリヒ王が話し合っているところへ進み出て、大声で叫びます

テルラムント

神明裁判なるものは、嘘とまやかしだったのです。あなた方は魔法にたぶらかされたのです。栄光に輝いているあの男を、私は魔法の罪ゆえに告発いたします。あなた方は、きわめて不当にも裁判で私の名誉を奪ったが、
そうなったのは、あの男が神明裁判に現れた時、誰一人問いを発しなかったからです。この男の名前、身分、賞罰を全世界の目の前で、私は問いかけます。この男の義務は、私の訴えに答えることです。それができないとなれば、この男の清らかさとはよこしまなものだということが誰の目にも明らかでしょう。

ローエン格林

恥を忘れたお前になど、答える必要はない。悪人の疑いには、私は答える必要はない。私は王にも答えなくて良いのだ。諸侯の最高会議の場においてもそうだ。だが、ただ一人、私が答えねばならぬ人がいる。それはエルザだ。

その肝心の当のエルザは震えています。激しく考えています。だれの目にも明かです。心の底に疑いが芽生えたのです。ローエン格林は愕然として息をのみます。

エルザ

(独白) あの方の隠し事は、ひとたび口に出され、明るみに出れば、きっと、あの方に危険を招き寄せるに違いない。私がもし、それをここで明るみに出し、私の恩人を裏切ったとしたら、ああ、なんとという恩知らずでしょう。

テルラムントの新しい提案

そのエルザの姿を見て、テルラムントはこっそりと近づいてささやきます。

テルラムント

私を信じてくれ。教えてやろう。お前の心が安らかになる方法を。
あの男の体から、ほんの少しの部分でも切り取ってこい。指の先っ
ぽでもよいのだ。そうすれば、あの男の隠し事がお前に明らかにさ
れ、あの男はお前に忠実になる。夜、また行くぞ。そうすれば、だ
れも傷つかず、速やかにことは成るはずだ。

ここで、第2幕は終わります。

第3幕

男性の咆哮

では、いよいよ、「第3幕」です。「第3幕への前奏曲」で始まります。この曲は、勇猛果敢で、極めて男性的な音楽です。独立して、演奏会などでもとり上げられる人気の曲です。オーケストラのなかでも活躍の場が少ないトロンボーンが、珍しく、太い低い力強い低い響きを、朗々と、素早く、天高く響かせる豪壮な音楽です。表現記号の「*Sehr Lebhaft*」は、「生き生きとした、元気な、活気に満ちて」です。骨太のトロンボーンを中心とした金管楽器の演奏者たち全員が、それこそ、生き生きと、元気に、活気に満ちて、ここを先途(せんど)と吹き荒らします。



なぜ、金管楽器群は、こんなにも張り切って吹くのでしょうか？ 第3幕では、エルザとローエングリンが結婚式を終えて、初めて二人だけの夜を迎えるのです。それで、金管楽器群は、ローエングリンに成り代わって、前もって、男性のベッドでの喜びをあからさまに表すのです。全金管が、三連音符によって素早く上昇し噴出する音型がそれです。歓喜のいただきです。すさまじい男性の雄叫びであり、咆哮(ほうこう)であり、喜びの爆発です。絶頂期には、ティンパニがドドド〜と鳴り、シンバルがガチャンと響きます。

この音楽的な性の喜びの表現は、オペラでだけできるものです。交響曲では、こうはいきません。ただ一つ、成功してるのはブラームスの「交響曲第2番」の終楽章だけです。オペラでは、モーツァルトの歌劇《フィガロの結婚》の第4幕のフィガロのアリアでも、ホルンによって花婿の喜びが表現されます。ヴェルディの歌劇《オテロ》や《ファルスタッフ》でも、ホルンの音は「カ

カルド」(cuckold)の象徴として用いられています。オペラだけの特技です。

情愛より情欲

一番顕著なのは、リヒャルト・シュトラウスの楽劇《薔薇の騎士》の序曲とそのままつづく第1幕の最初のシーンです。場所は元帥夫人の寝室。ベッドの上では、元帥夫人と愛人のオクタヴィアンが愛しあっています。そのときに、金管の咆哮と雄叫びが遠慮なく鳴り響きます。「エロス」(情愛)を越えた、「ポルノ」(情欲)的表現です。このときのカルロス・クライバーの嬉々とした指揮振りはどうでしょう！ 嘆かわしいものです。

バイエルンのミュンヘン宮廷管弦楽団のホルン奏者をしていたリヒャルト・シュトラウスの父のフランツは、大のワーグナー嫌いでした。ワーグナーがやって来て自分の作品を指揮するとフランツは練習にも出ませんでした。楽団から出るように言われて仕方なく出たものの、「吹けと言われれば吹きますが、観ろと言われても観ませんからね」といいました。そのフランツが、息子の楽劇を観たらどう思ったでしょう。

《ドン・ジョヴァンニ》の謎に迫る

NHKの土曜講座でこのようなことを小声でお話したら、夜、受講生の方からメールがきました。

ドン・ジョバンニの始まりが、ローエングリンの第3幕の前奏曲や薔薇の騎士の序曲のような、あからさまな音楽になっていたら、ドン・ジョバンニとドンナ・アンナの関係が明白になったのに…と思いました。

これは、凄い指摘で、鋭い発想です。モーツァルトの《ドン・ジョヴァンニ》も謎が多いオペラです。まず、第1幕の冒頭です。仮面姿のドン・ジョヴァンニが騎士長の娘ドンナ・アンナの寝室から逃げてくるところから始まりまず。逃げるドン・ジョヴァンニをネグリジェ姿のドンナ・アンナが追いかけます。「逃がさないわ」といいながらドンナ・アンナは門の鍵を掛けます。そして、悪漢に抱きつきます。このとき、みている私たちは、ドンナ・アンナは、悪漢を捕まえるのではなく、恋人と別れたくないかのように見えるのです。そして、寝室で、ドンナ・アンナはこの悪漢にレイプされたのだと気がつくのです。でも、このことは最後まで分からないままです。ヒントは、あります。その夜以降、ドンナ・アンナは許婚のドン・オッターヴィオを避けるようになります。最後のシーンで、「悪人(ドン・ジョヴァンニ)が死んだので、さあ、結婚しましょう」というドン・オッターヴィオに、「一年待って下さい」といいます。これは、妊娠を危ぶんでいるのです。「レイプされたか、されなにか」が気になると、その手がかりを探して、序曲に耳をすませたり、ドンナ・アンナとドン・ジョヴァンニが出会うたびに金管の響きがしないかどうか(笑い)緊張感が走ります。でも、モーツァルトは、決して底を割りません。残念です。

無駄骨の前奏曲

しかし、この第3幕では、金管の咆哮のような情熱的なことは起きないです。エルザとローエングリンの二人はベッドを共にすることはありません。寝室では、直ぐに、エルザが、ついに、禁忌の掟を破って、ローエングリンに名前と由来と本心を訊く場面が始まるからです。ですから、この前奏曲の乱痴気騒ぎは、空騒ぎに終わります。それなのに、なぜ、ワーグナーはこんなないはずの情景を現す「前奏曲」をわざわざ書いたのでしょうか？ 男性の観客へのサービスでしょうか？ それとも、ワーグナー独特の冗談のつもりでしょうか？

この激しい前奏曲のあとに続いて、今度は一変して、厳かで神聖な結婚行進曲が静かに奏されます。世界中の結婚式で使われる二大行進曲の一つです。でも、メンデルスゾーンの「結婚行進曲」は、劇付随音楽「真夏の夜の夢」のための音楽で、二組の恋人たちがめでたく結婚するときの華やかで幸せな楽しいものです。一方、ワーグナーの結婚行進曲は、音楽自体は神聖で厳かな行進曲なので遜色ありません。でも、結婚した二人の行く末は違います。結婚式で、ワーグナーの結婚行進曲を選んだカップルの離婚率は高いという統計があります。(ウソです)

新婚の寝室でのこの新郎新婦の会話は、期待と喜びがこもったものとは違って、なんだかギスギスしています。ワーグナーがこのあとで書いた《トリスタンとイゾルデ》の第2幕の「愛の二重唱」の濃厚な熱愛の表現とは全く違うものです。

こんなにも愛してる人を、いつかなくすことなど、とても耐えられません。エルザは、見知らぬ夫に、訊いてはならぬことを訊きます。

エルザ

前から私はあなたと出会っていたのです。あの幸せな夢に現れてくださったではありませんか。だから私は、この現実の世界であなたを見たとき、あなたが神に命じられてやって来たことがわかりました。この言いようもなく幸せな愛という言葉。でも、ああ。あなたのお名前。それを知ることができない。かけがえない人を名前で呼ぶことができない。せめて愛の静けさの中にいるとき、私があなたの名を口にするのをだけはお許してください。

あなたの心を悩ますものを教えてください。全世界に黙っていななければならないほどの秘密なのですか？ 世界がそれを知るようになれば、災いが待ち受けているというのですか？ 仮にそうだとすると、私がそれを知ったとしても、私は大丈夫です。どんな脅迫に晒されても私が口を割ることはありません。あなたのためなら、私は死んでもいいのですから。

ローエングリン

私の払った犠牲に釣り合うものは、ただあなたの愛にしか有り得ません。

だから決して疑ったりしないでください。あなたの愛こそが私の誇るに足る贈り物なのです。なぜなら私は、苦しみの夜から来たので

はなく、輝ける喜びの国から来たからです。

この「喜びの国から来た」という言葉がエルザをおびえさせます。興奮したエルザは、狂気のようになります。オルトルートの言葉や領民たちの不安な思いを思い出して、ローエン格林に対する不信を一気に激しいものにさせます。

エルザ

あなたが別れてきた世界は、そんなにも至福の世界なのですね。喜びの国から来たあなたは、もう帰りたいと思っているのでしょうか。惨めな私に、あなたが私ごときの忠誠で満足できるなどと、どうして信じられるというのでしょうか。きっと朝が来れば、あなたは私を愛したことを後悔して、去って行ってしまいうに違いありません。

あらっ、あそこに、白鳥が、白鳥が。あなたが呼んだのですね。小舟を曳いてやってくる。私の心を静めるものはない。ただ一つのことだけが私を救う、たとえ命が奪われたとて、私はあなたがだれなのか知りたいの。優しくて不実な人。聴いて、私は問いかけずにはられません。私にお名前を教えて。

ローエン格林

(ひとりで立ち尽きたまま) ああ、私達の幸せは全て消え去りました。

瓦解するローエン格林の使命

エルザの言葉を聞いて驚くローエン格林。ここにおいて、ローエン格林の使命は、一度に瓦解(がかい)するのです。「瓦解」とは「屋根の瓦(かわら)の一部が落ちればその余勢で残りも崩れ落ちるように、物事の一部の崩れから全体の組織がこわれてしまうこと」です。それで、《ローエン格林》の物語も、あいまいで、弥縫した仮縫(かりぬ)いのまま、未完成で終わることになります。

一体、ワーグナーは、この《ローエン格林》のオペラでなにが言いたかったのでしょうか？ 伝統的な「禁忌の掟」から、全く自由になっていません。それよりも逆に、禁忌の掟に縛られて、返ってそこから抜け出そうと、無理に喜劇にしてしまいました。ドレスデン革命に参加したワーグナーは、この完成された《ローエン格林》の総譜をもったままで亡命します。亡命者のオペラなど、だれも上演してくれるわけはありません。しかし、ここには、オペラで社会を動かそうという革命的なものは少しもありません。あのバイエルン国王ルートヴィヒ2世が、このワーグナーの《ローエン格林》に心酔して、のちにワーグナーのパトロンになったのもハッピー・エンディングのおかげです。テルラムントとオルトルートが勝利するような、「禁忌の掟」を死守する悲劇的な結末だったら、若き国王も、ワーグナーに興味を示さなかったことでしょう。亡命した翌年の1850年に、ワイマールにいたリストはワーグナーの依頼を受けて宮廷劇場で初演します。むろん、亡命してスイスにいたワーグナーは観ることはできませんでした。

オペラよりも演劇を

ワイマールでの初演は、大成功とは言えませんでした。舞台も小さく、管弦楽もわずか38人編成で、歌手たちも二流以下で、歌も、役柄も、難しく、のちに主役を歌ったイタリアのテノール歌手マリオ・デル・モナコは言っています。【渡辺護著『リヒャルト・ワーグナーの芸術』参照】

ローエン格林を演ずることは、軍隊で気をつけをしているようなものだ。軍隊の場合と同じように、緊張のあまり気が遠くなってしまふ。四時間のあいだ動かずにまっすぐ立っていて、ことばを通じてすべてを伝えなければならぬということは、どんな感情のはげしいヴェリスモの役より緊張を感ずる。

オペラ的であるよりも、演劇的な要素が多かったのです。それで、最後は、仮縫いの「疑似ハッピー・エンディング」で終わるのです。世間は、それにも我慢出来ず、「ローエン格林とエルザが結婚出来ないのは、やはり、納得できない」と言う意見がおおく、「二人を、ぜひ、結婚させてやってくれ」という申し出がワーグナーの親友たちから起きました。最初は聞く耳持たなかったワーグナーでしたが、完成から4年後になっても、また、文筆家のアドルフ・シュタールが言いだし始めました。ワーグナーもその気になって、完全なハッピー・エンディングへの変更を考えました。それを聞いたリストは猛反対しました。

ワーグナーは、リストに手紙でいいました。【同上】

君は、《ローエン格林》を正しく理解してくれた。シュタールは間ちがっていた。私は彼の判断に対する賛成の意を撤回する。この同意は性急であった。

ハッピー・エンディングな宣言と宣伝か？

むろん、ワーグナーには、元々、禁忌を主題したこの歌劇を選んだ以上、ハッピー・エンディングで終わらせる意図などなかったのですから、二人が結婚しないのは当然の結果です。でも、そんなワーグナーでしたが、あえて、悲劇でもなく喜劇でもない、あいまいな弥縫策を、台本のあちこちに用意したのは解(げ)せません。

では、一体、なんのつもりで、ワーグナーは《ローエン格林》を書いたのでしょうか？ 自らがローエン格林となって革命を成就させ、新しい国家と幸福な社会を打ち立てるための「ハッピー・エンディングな宣言」なののでしょうか？ 大衆が望むポピュラーなオペラを作曲して新人作曲家としての評判を確立するための「ハッピー・エンディングな宣伝」なのでしょうか？

作品か人生か？ 悲劇か喜劇か？ やはりこれらの疑問こそ、大志ある若き大作曲家が抱くさまざまな矛盾から生まれたものです。私が、《ローエン格林》を、「悲劇か、喜劇か？」で、判断を決めかねているのはそうしたかれの弥縫策のおかげです。

都築正道